

高瀬川の夷舟（絵葉書：明治33年～40年）

の形状は、西  
堤が高さ4 m  
(2間)、天端  
が12 m(6間)  
であった。東  
堤は洪水を考  
慮し、高さが  
2 m(1間)、  
天端が4 m

の形状は、西  
堤が高さ4 m  
(2間)、天端  
が12 m(6間)  
であった。東  
堤は洪水を考  
慮し、高さが  
2 m(1間)、  
天端が4 m

の形状は、西  
堤が高さ4 m  
(2間)、天端  
が12 m(6間)  
であった。東  
堤は洪水を考  
慮し、高さが  
2 m(1間)、  
天端が4 m

ある。「京町鑑」(1762年)には、「中古まで寺町より東は川原なりしゆへに号す。古老曰、天正年中に開けり」とあり、河原町通は川の一部であった。この河原町通の東側、鴨川の河原に鴨川の水を引水して整備されたのが「高瀬川」である。高瀬川は1614年に角倉了以・素庵親子が造った京都と伏見をつなぐ約10・5 kmの運河である。運河が掘られた理由は、京都大仏殿を再建するための用材が鴨川を使って運ばれたことにある。鴨川の川筋を掘り直し、曳舟で資材が運ばれていた。その様子は、江戸前期に描かれた「洛中洛外絵図」(歴博D本)などで確認できる。しかし、鴨川の舟道は洪水で流されることも多く、安定的に資材を運ぶには適していなかった。

そこで、洪水の影響を受けない運河を、了以親子は既存の農業用水路も活用して整備した。高瀬川の開削に伴い、二条七条の間は鴨川の中に鴨川の水を取り込む運河が整備され、米、酒、薪や畳などを運ぶ高瀬舟が見ることができた。高瀬川沿いには問屋が立ち並び、鴨川の河川敷に舟運を活用した物流拠点が形成されることとなった。この物流拠点を水青から守るために、公儀のもとで寛文年間に整備されたのが「寛文新堤」である。京都産業大学図書館が保管する「川方勤書」(宝永年間)に「板倉内膳正殿御在京之節、三拾八年以前寛文八中年東西側堤四千五百間程宛出来(略)」とあり、1668(寛文8)年に両岸に約8・4 km(4、200間)の堤防が整備された。そ

(2間)と平安京を守る西堤と比較して2 mも低い形状となっている。寛文新堤の整備により鴨川の川幅は約100 mに狭められ、石積護岸の傍まで茶屋が建てられ、低床形式の納涼床も始まるなど鴨川周辺の空間的な景観は整い、京都の街が鴨川を中心に発展することになった。

この状況は明治期まで続いたが、明治の近代化が進む中で、左岸(東側)には新たな変化が生じる。琵琶湖疏水の鴨川運河と京阪電車である。1890(明治23)年に完成した琵琶湖疏水の効用を更に高めるために、伏見を通じて大阪へと物資を運ぶ鴨川運河は1892(明治25)年11月に着手し、1895(明治28)年3月に竣工している。鴨川運河の全長は鴨川落合から伏見の堀詰まで約8・9 km、幅員は約6・1 mであった。さらに、1912年に竣工した第二疏水による水量増大に対応するために、鴨川運河の幅員が約12・7 mに広げられている。この鴨川運河は、鴨川の河原に造られた。同時に、京阪電気鉄道が五条から大溝橋まで鉄道路線を1910(明

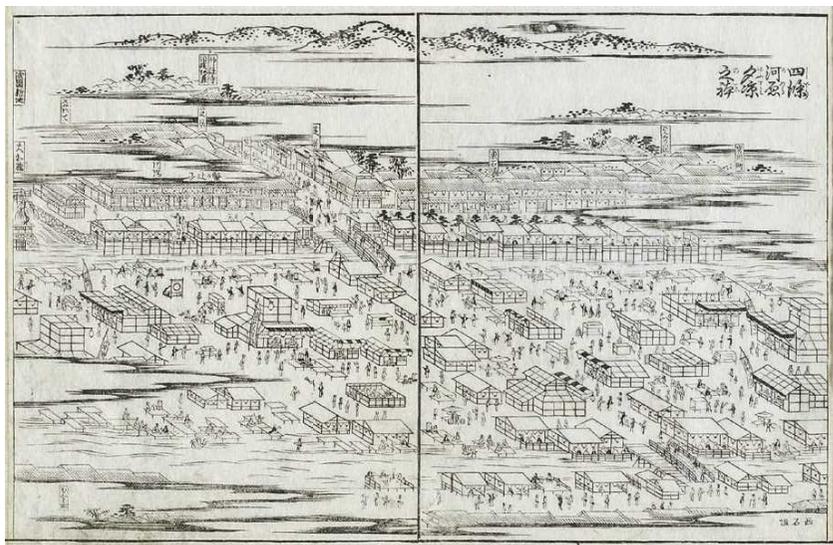
昭和の時を経るなかで中州に床几を置くのではなく、川辺の飲食店で高床式の床を楽しむ現在の形状へと移行した。これらの変化も楽しみながら、涼を求めて鴨川に集う文化は何代にも渡って育まれてきた。鴨川に集うのは、京都人のDNAともいえる。

ここまで述べてきたが、鴨川で間隔を開けて座る理由を聞けば、「他の人と一定の距離を取りたいから」と答えられるであろう。確かに、行動心理学に基づく社会科学の距離ともいえる。しかし、単純に心理学的な理由だけではなく、これまで述べてきた護岸の構造や水深など自然科学的要素も含む3つの要因がなければ生まれなかった現象である。「鴨川・等間隔の法則」は、鴨川の特性を端的に示す空間的活用事例といえる。

鴨川の空間的活用は、もう少し広い視点からも捉えることもできる。平安遷都後の鴨川の川幅は、土地利用の状況から4000〜5000 mであったことがわかる。この状況は江戸前期において劇的に変化する。その要因が高瀬川、寛文新堤の整備で



鴨川に沿って運行する列車（絵葉書：大正7年～昭和8年）



見せ物小屋や茶屋が立ち並ぶ鴨川納涼床の情景【部名所図会(巻之二)】(1780年)  
(国語日本文化研究センター所蔵)

最後の「歴史」は、鴨川に集う京都独自の河川文化である。その文化とは、京都の風物詩の一つでもある「納涼床」に他ならない。納涼床は

祇園会の神事として、旧暦の6月7日から18日の間で四条河原を中心に1650年頃に始まったと考えられている。当時の様子を、納涼床に関する最も古い文献とされる中川喜雲が記した「案内書」(1662年)は、6月7日の祇園会の条に「その夜より、四下うがはらには、三下うをかぎりに茶屋の床あり。京都のしょにん毎夜すいみにいづる。餉うり・あぶりどうふ・真瓜等の商人、よもすがら篝をたく。人の群集うたひどよめく事、野陣の夜に相似たり」とあり、夜陣のように賑わっていたことがわかる。さらに1700年代には水からくり、手つな、諸国珍物などの見せ物や露店で賑うようになり、1750年頃には10日ほどであった期間が、「後涼み」と称して6月から7月末までの2ヶ月に渡るようになった。その後、納涼床は二条河原でも行われるようになり、1800年代に入ると見世物小屋は少なくなると茶屋中心の形態へと移行している。床の形状についても、鴨川の中州に置かれた床几ではじまった鴨川納涼床は、寛文新堤の護岸整備に伴い低床式の床が生まれ、明治・大正・